孝子
柳猫の
義侠
小松
力士の上ヶ汐
妻帰り
雷神の太鼓

腕競心比候

初編

川上鼠邊編輯
梅堂國政画

迂文拝

印刷は料理屋孝子

孝子八柳の藝妓小松
義夫の力士上汐
孝子八柳玉吳畫
上の巻
東都橋柳光宗圖
尼田鶴三郎

A494
1

腕競

心之候 上之巻

初編

川上義述 編輯

梅壺居 愛国 金松堂 壽梓

<48-8247>

目今世ゑ謂腕競と、抑何を以て然称ふ野見當麻の往古。梅ヶ谷阿武松の現在あるまで。或ひハ羅生門の茨鬼草閨の朝比奈等ヶ。腕力をいふも非ず。力をも入るまで！て猛きを感ド和ゞる者。又ハ坐して商法の進退と言る者。筆頭一字千金の換る者。且らを腕とのみ可き欲。當時硯の海ゑ浮ひて。淀ち濁らぬ川上ぬ！ハ。筆柄採ッての達者ゑ！て。今流行の三冊物ゑ。其腕力と諸子と競べ。毎回勝利を繙草紙の。趣向ハ實ある花紅ひ。孝貞義俠毒悪の三幅對の腕競ハ。其元鼠髭の毛頭より生る。鼠辺子ヶ強記卓説斬々佳與ゑ入江の上汐。雷名世ゑ鳴る娯評判ゑ。京文社の南窓小松の蔭ゑ愛育てぞ冀望

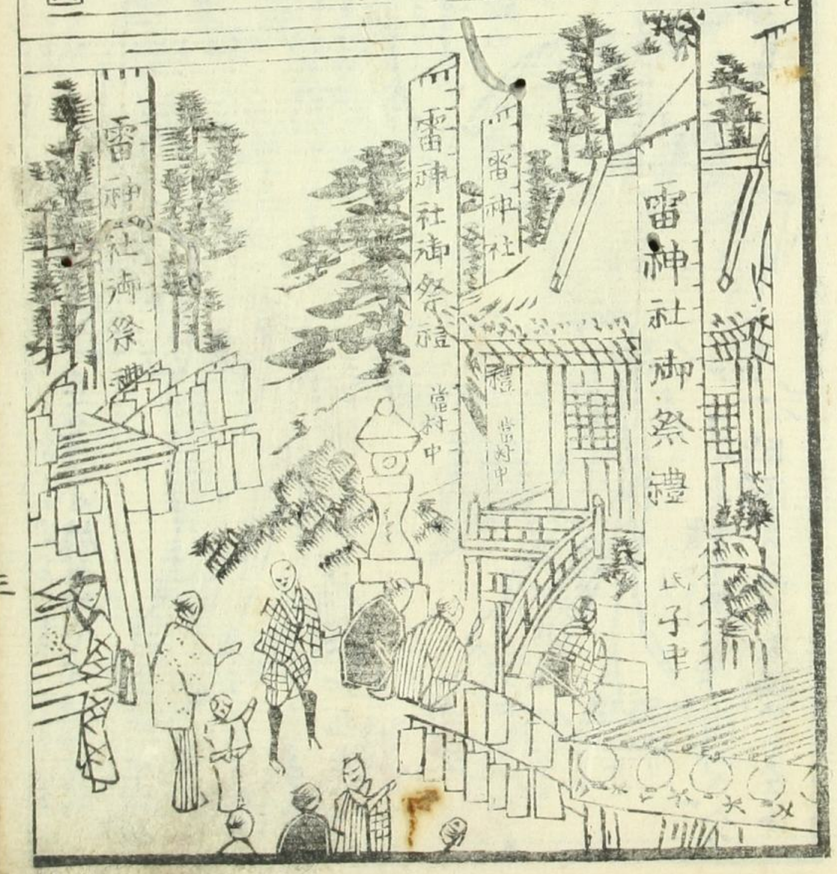
明治十三年第四月

金花猫翁魯文戯述

上汝妻ゝゝ
上州屋清兵衛
忤勘之助

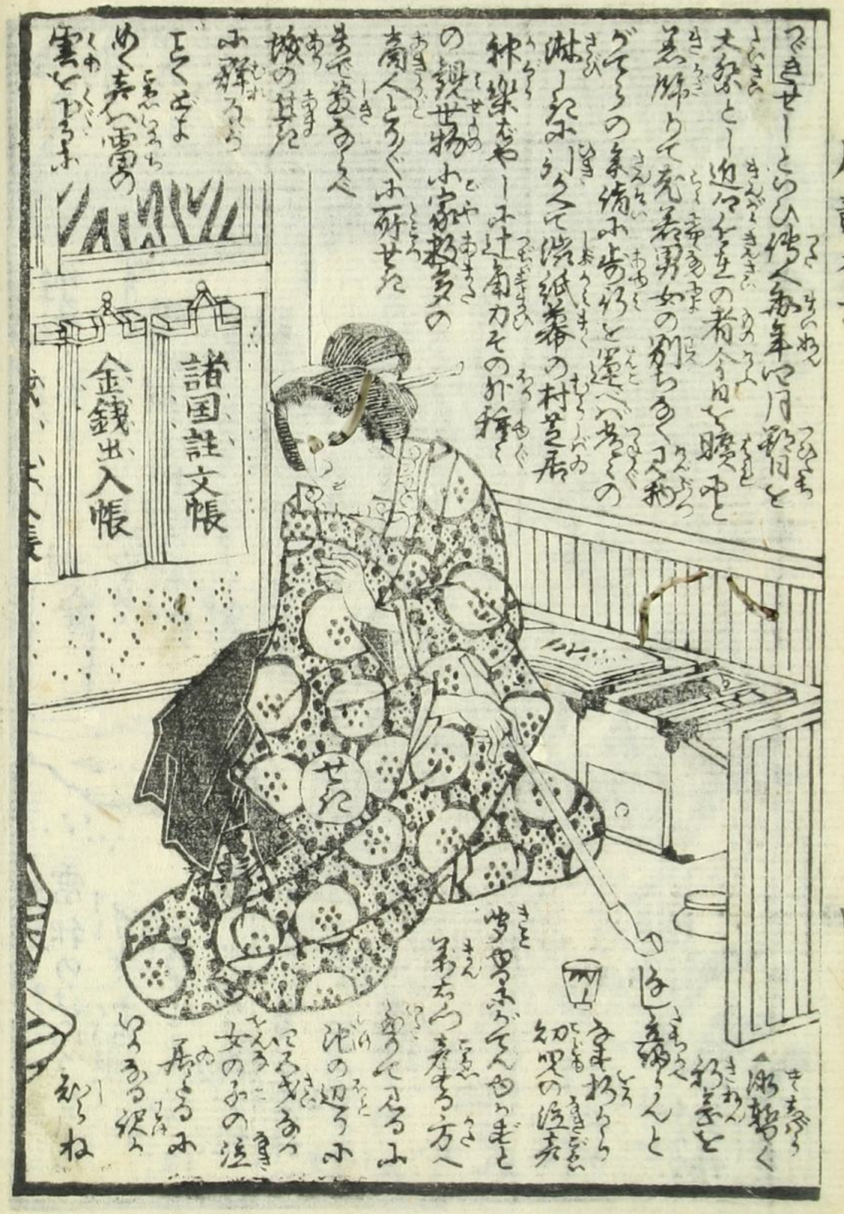
尾張屋治三郎
柳(芝)壽屋小松

人間万事塞翁が馬
後を見人の引後へる世の
中へ三日月なれ月永樂花
開く中小数多へ生る
あく者悪者悪
者の見へ者悪へ見る
車の輪めぐり廻る
世をうつす変小説世
物語へ新永六年のこと
とゝ不十絵の出たるの
城を上升大坂陣の戦下
お江戸町人花屋茶屋
とゝ繁盛原浪世の者
なり妻をお世紀と 終



つゞき
坂倉村
第一関田
南北五丁
丁

坂倉沼
雷神の社

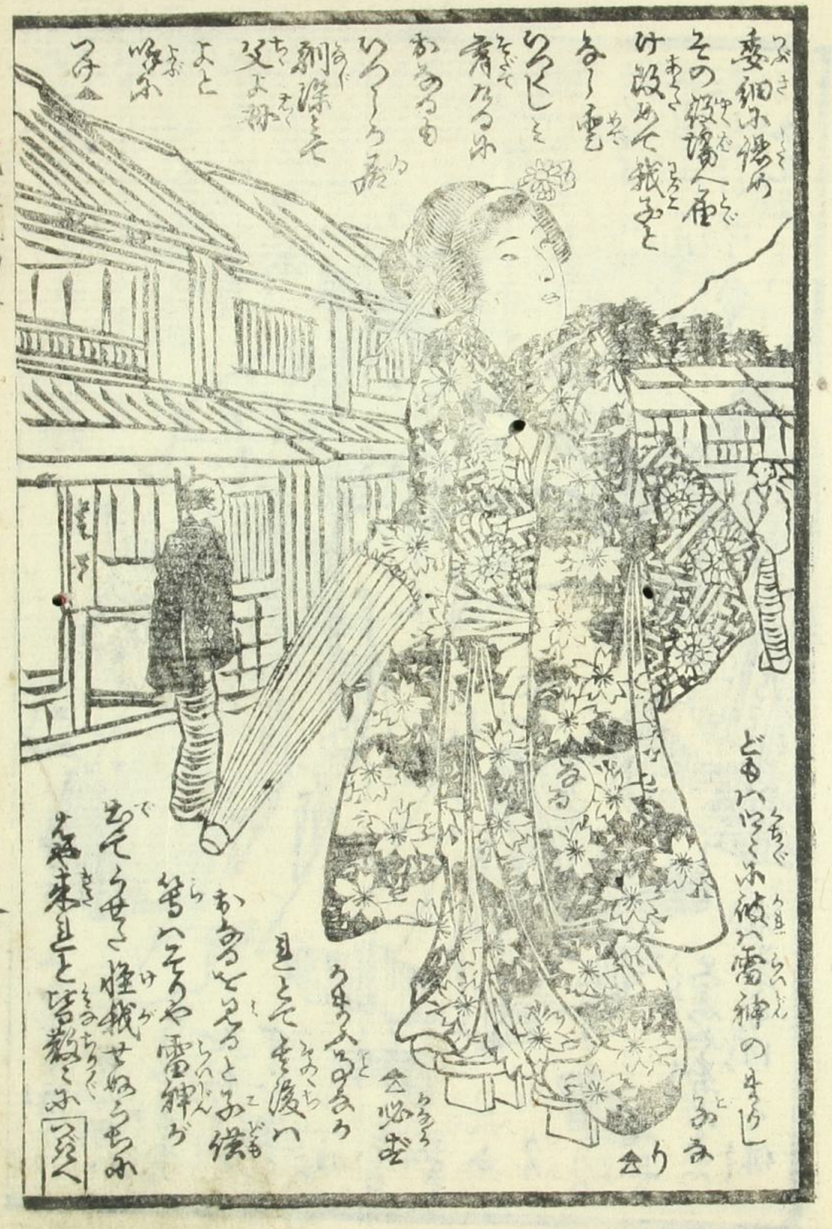

諸国註文帳
金銭出入帳
せた

諸国註文帳
清書帳
万

つゞき
ふ
て
もまつは
芸ぬらと
芸婦
徒芸
歌く兒の
▲あり汲めて芸ひ矢ん
と芸がらくび女房もろん
みさうでとぎんを
芸がらんとぎろ
ませうと
つゞく

懐ろとさろ元
るゝ沸線のもろ
代とりの方史元
て開ろもとゝ和弘のもろ
のもとゝ和のひと以ろの白
紙（嘉永二年己酉年二月
共月出宝決如ある」と考せ斗り史
弱ゝるたろも泣ゝの赤びんさ芸婦ゝ
吐息とつゞくと
郭ふるこのゝ方と拾ひ
ひ巳せゝ出稼ろ和行巳海
ゝ全く二人ゞんの赤ー
雲紳のさづけのひしゝ赤ゝ
ろ文祝ゞ移ゝ赤ゝ赤ゝと
ゝ芸ひ

▲女婦い婦一く何ごとと寒ゑて有つち
ちひして衣敷ハ勿論お拵ひ物ハ是
あれやうなてゞいかゝる由今さこの
ふ侍の娘都をもろ
宮ふよいふを
眺るゝ顔の雲らしき女婦い
らちふ明ちるた
燈と鶯らふ鶯
きて鶯一眠りふ
つるふるる彩て
まるるふ、その
羽重月投会
の雷神
社あてを
一次郎を

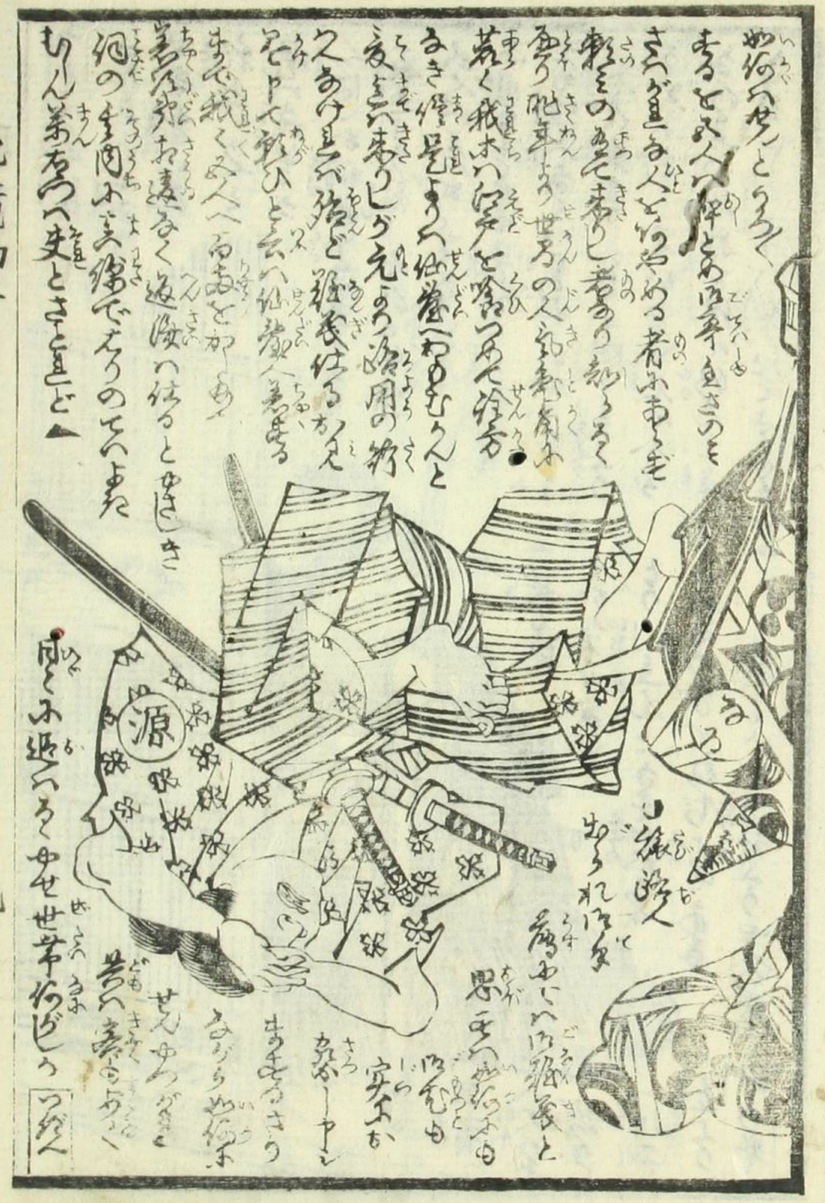


変細ふ傷の
その殺諸人面
け設めて我ふと
なゝ雷
りゝしを
青るふ
おるる
りゝゝる
刎深を
父よ神
よと
呼ふ
つみ

どもハにくふ彼ハ雷神のまり
ふみ
りる
必ぜ
ふまるふるるる
まとて生後い
おるとふるとふ侍
笠ハそろや雷神ゞ
ちて生さ怪我せぬちふ
大丈夫と皆教ふ

つゞき
文
登
波

万
次へ

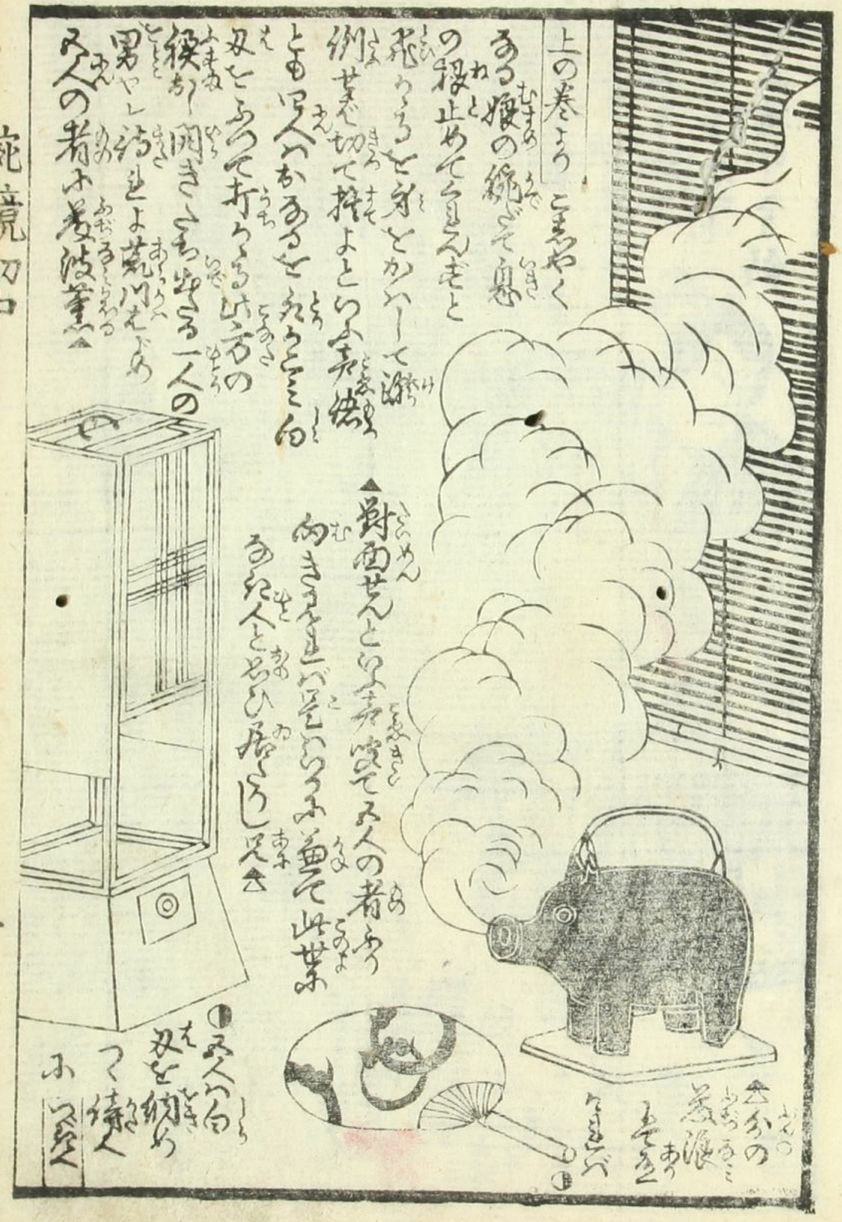


開化七編 全 開化女用文章 全
新山紀聞 夜叉風門鬼怒花吹夢
義経四天白首 全 金花七變化
漢語用文 伊呂波字引 黒衣女鳴神
文 地本問屋 錦繪問屋

毒婦の古河の雷神の拵

腕競心

宛竟
雜
周文画
中巻
初編
心の玉
重板堂
雅


宛竟 中巻
上の巻より こまやく
ある猴の綿ぞめ惡
の猴止めてうまんまと
花ちらすと外とかいーて
例せて切て拵よとの事
とも見人にあるとみちらとこ
又とふつて打ちるは方の
猴ち同きこまちゆる一人の
男やしに結ぶよ荒川さよ
人の者ハ者波業
▲尉面せんとの事ぞ人の者ハ
内きるを出ハ見ちるふ魚ぞ此世ハ
ある人とちひ孫ちし足
▲分の義浪
▲人の面
又を紡ち
て猴人
ふ足

つゞき
源
重
藤

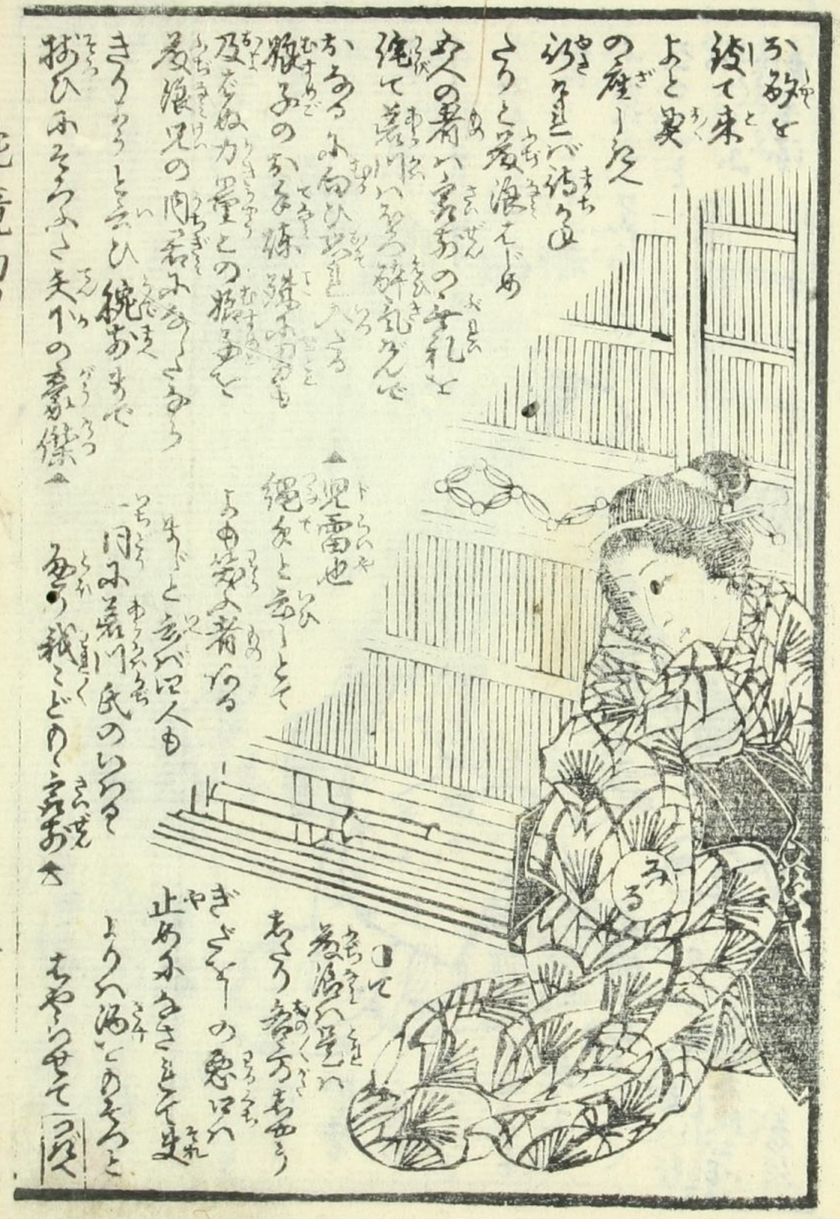
文
万

つゞき
藤

薫五人の者の物語りの図と見る

つづき

つゞき



つゞき

つぎ一ぱいさてと云来ようして例のごとく
今年はいとふ姫初の実のうめ多ふ焼
きまたいせ蓬莱とあふ木ぢ松びも祝ひも立流ふせん
りめとそうふ正月ようの奥様ようの来客
角士の廻りを喜ひとしと
夜ひ晴天の月祝
ひわ撲と僕ハー
ろうきとべた
ハのハさうきのう
をマを主の
男女大角士と
祝はせと初月の
第月ようちの町ハ
張ひて商売の繁栄云ん

父さんハ祝ひさお金ハ二百
ぬなまうお家の祝
して居ようしてお
年ひとそも入ふと
ろうて父さんや母
さんの用祝を思
ひ金人ざお金も
ようのやうぶ年
度ゆ多教へてもれ
べ二十日大夫寄ろう
ようといみろくふ
私のをせい
ろうねゆ家業
ちひお金さ

方多くとホ大
第ロ方ホハ第
田ようよう沒ち
ホ横若山路
めとて八九人の
赤糸角士ハ
田を初月の祝
ひ沒ハ沒よ唄
ハホ沒稼る
よも下愛夫の
初注彼方の一下るホ
ひそくくとさやく二人上ハ沒ハ風の
奥ろ人もあくいむ稼先此方ホハ
笑人なりと神ようぬ一人ハ女とや

くて一ぱ行知ハ正ハ
ろうねど赤糸若ホハ
お遠ハるへが文ハお

二月
陸のその
ちハ行紀
ようホ長
ら与ようと
ちさ

つぎき
●さびしてびざん
を早うお
男い様まりよを「まを
その家の名い知ぬ
まると今有の咄を

途とちづさを必らぞ
上
万

銅版開化正編 全

開化女用文章 全

近世紀聞

復讐阿龜殺他化夢

義烈回天百首 全

金花七變化

漢語伊呂波字引 全

濡衣女鳴神

地球問答

金松堂 横山町

つゞき

ちかき頃もよしやとうろうと云ふに等九

ある當山院秋の名附りを楓葉の紅葉に

錦を大丈夫ハ千家の並の花相撲

今日を初日と見物の群集ふ度紀

角力場も是を入るの文も多く突ふ

勇ましく見へ人ふるゝ友ふ尾張やの▲

△ふらくる笑ひの顔ろうのこと

夢ふぎふ知る人もきゆうのなら

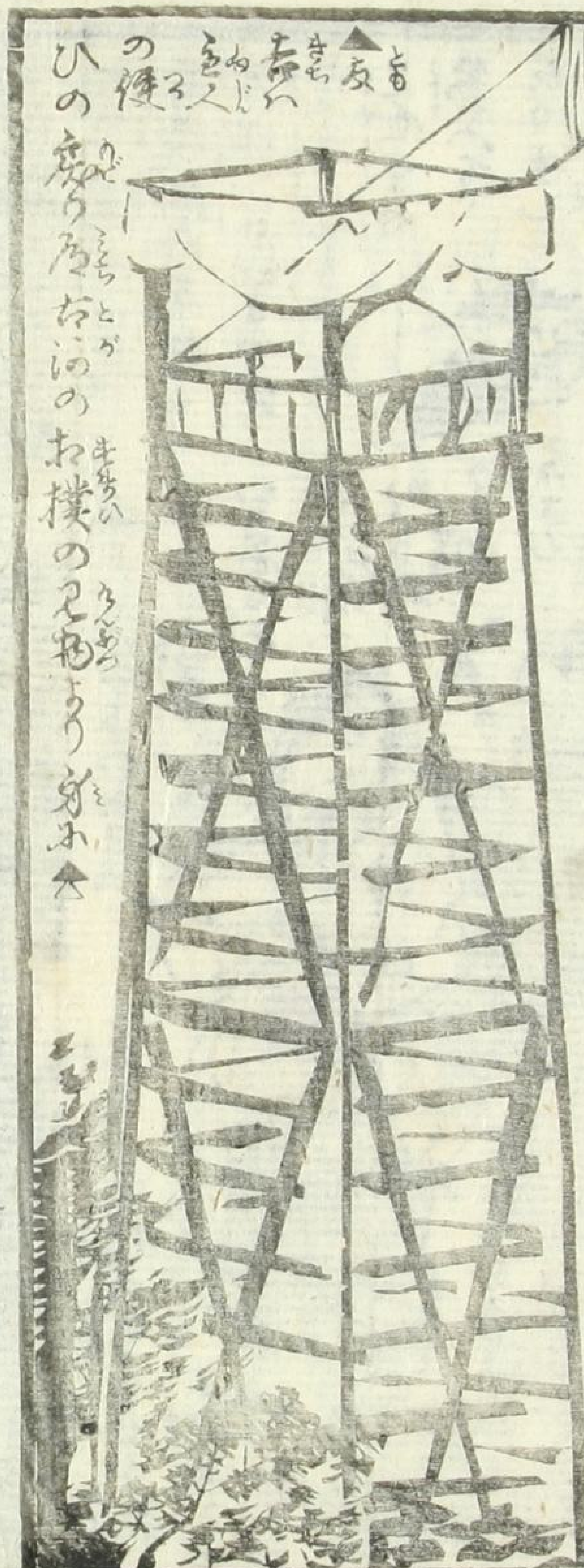
さ見へ手習の酒のかちよく

見る満潮も正午ぞろ弁當

めつく中食ぞ友吉わうち

向ひ親方ちよやと

下の巻へ



三馬侯笑初編

辻文梓

下の巻

中巻
金魚屋

つゞき

私しゝ
お供を致して
ちとやされ
ものしことなれて
友者がてん
やうを老者の
みしてよりゝ
汐が別
深中あるた
はさしゝ
ちとんまうもと
ろか腰をかあ人を
中夢が業内ふ
つ且そたが間のゝ

▲必ずとも
剣力見物を
べーとさそ
ま呼び
と筆ひ
の日の
ある用
み者を
生ぜか
通せ
ゆせば気
筆ひ
知れ牛らひと
拍後を決て友

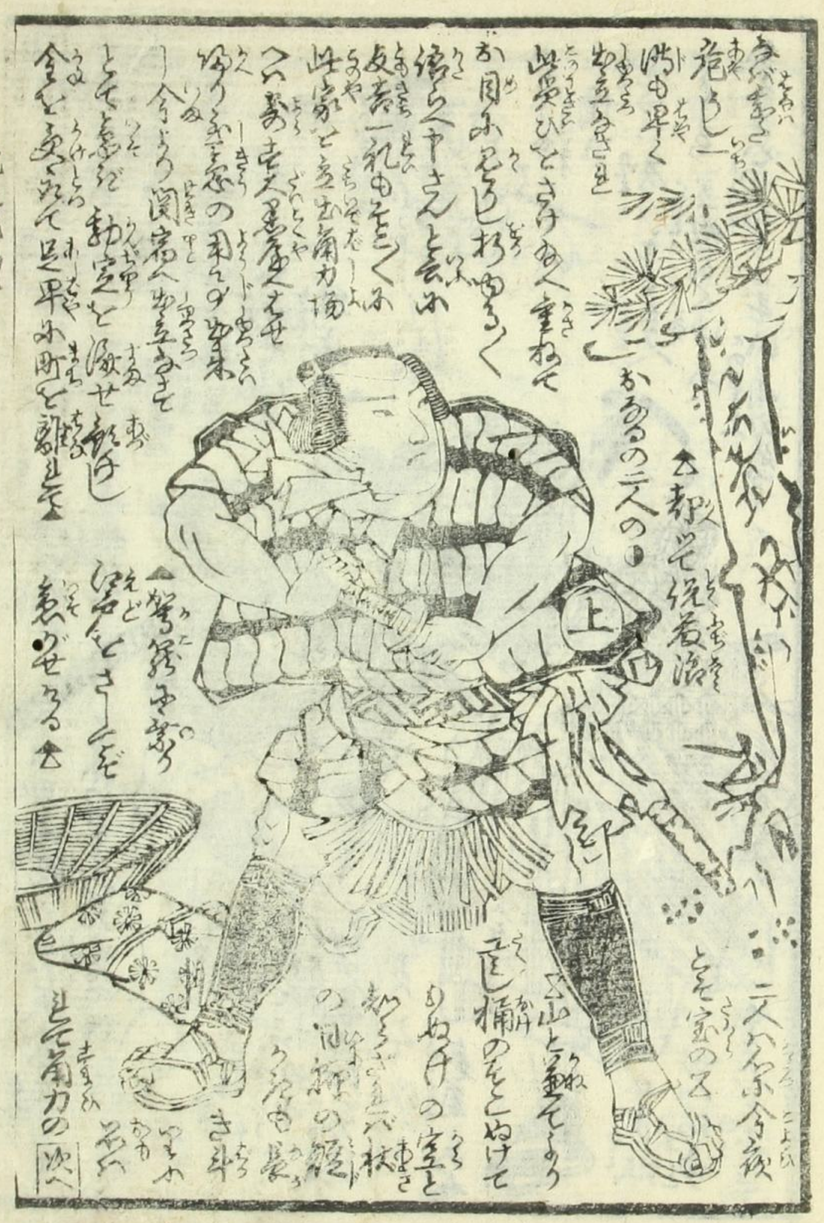
▲嬉しと且べ
松合あしとぞぜーを
つぎと今を

且ゐるさて男の別
京店の美まろゝる唯
義へ面是べ上ゲ汐ハ
いぎ比方へと座をゆづ
り初男番の接拶も
んせくまく程ゐ濃せ
中夢の長者ゝ口止を
しゝ一寄り友者ふ
打向ひか拍ばやせし
その子細ゝと脳病大
事屋みて厨の座り
斗らを唯ー二人の密談
拍後をと程ゐ和後り
せくまゝ知ゝとゐひ

色ぜーゝ二人の
悪者

者ハ嬉ゐる酒の肴
もさあ一方あるゝね
関れの口無いで
白て

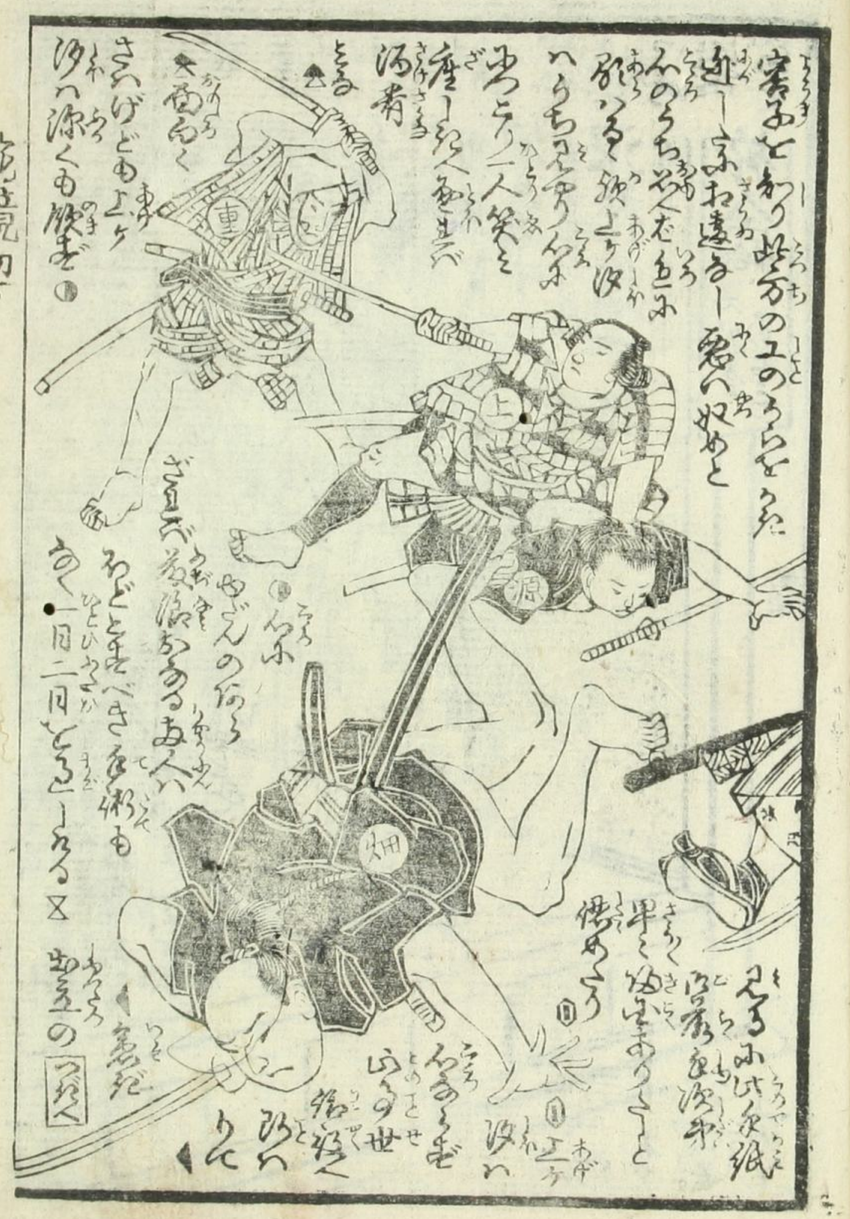
つゞく

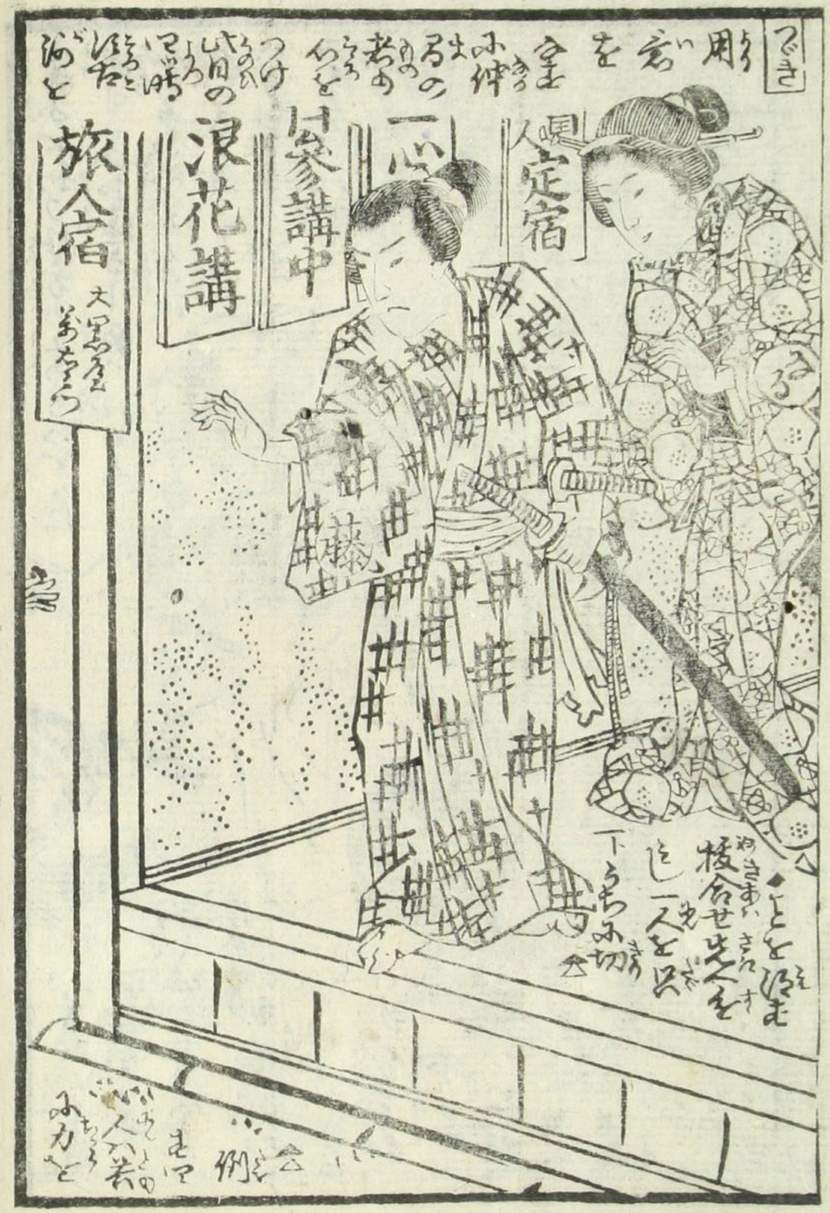


つぎ

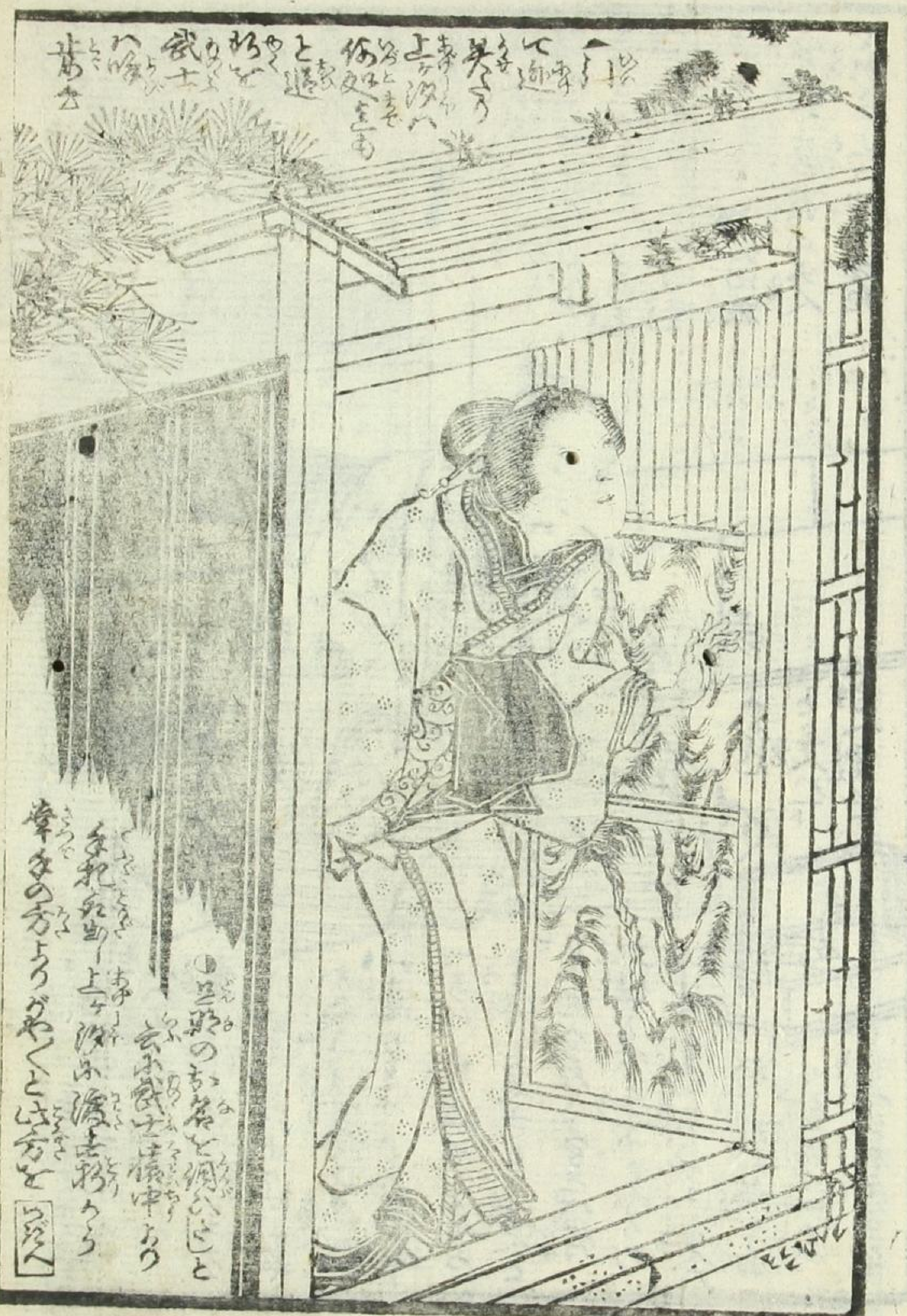
さるほどに清原の侍ども
の危きを命を投ひしとんのうちも
清原の軍勢多く打出の浜へ集へ
四方へ散る程に清原の
者ども連て逃る
緒者の

又見物の婦女大人小角力も
とりのきぶつ紙 角の




つゞき
定宿
一心
講中
浪花講
旅人宿
大黒屋
桜合せ先人を
一人を只
下うちふ切

合せ一人をうそんで
重
文

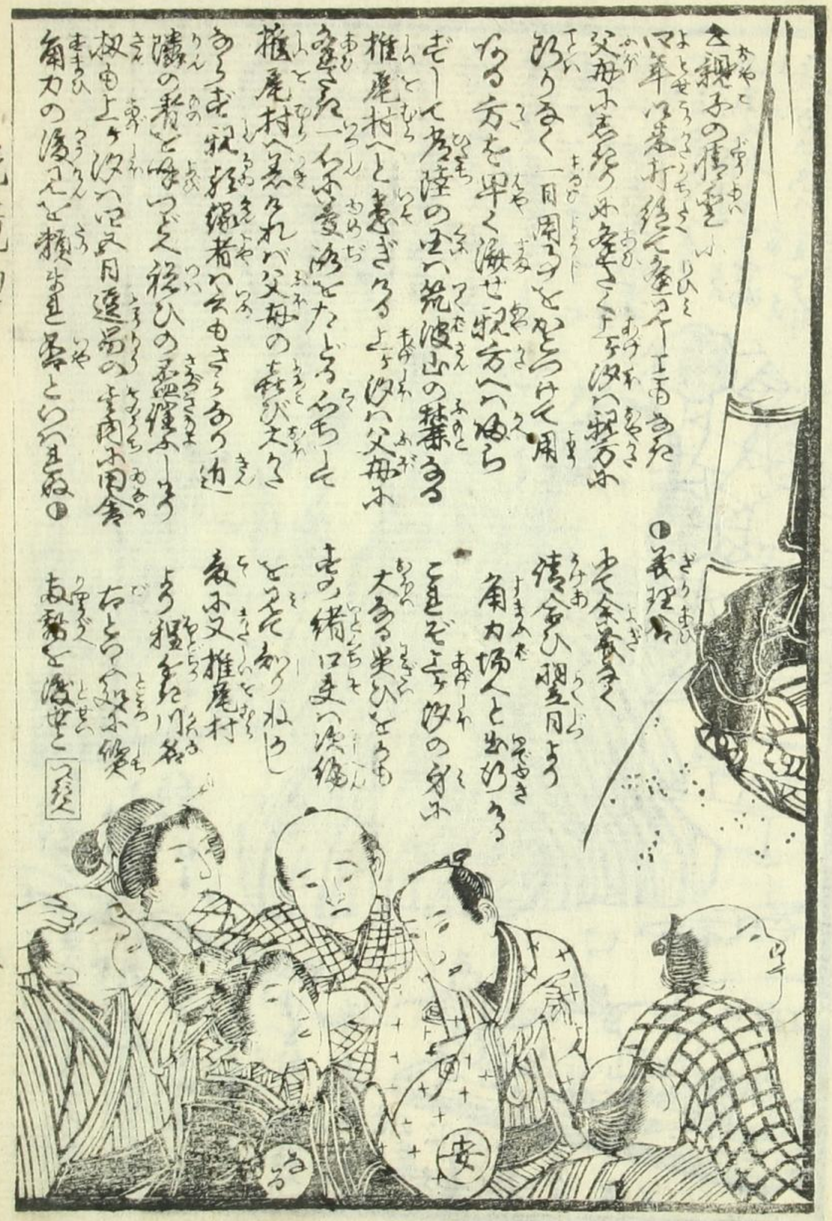


つゞき
上

つゞき
安

新

つゞきせんと
上


安

つゞき

○ひしと汲ゞつ本

開化文用文章 全
新撰開化編 上 同
新撰開化編 中 同
新撰開化編 下 同
新撰開化夢 全 同
義烈回天百首 全 同
金花七変化 同
漢語伊呂波字引 全 同
用文 巻末諸證文例
黒衣女鳴神 同
地本錦繪問屋 日本橋横山町三番地 蔦屋重三郎

010190517026